

---

# ゆめにっき二次短編 まじょ 「箒が飛ぶ理由」

文月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆめにしき一次短編 まじょ 「幕が飛ぶ理由」

### 【ZPDF】

Z0464BA

### 【作者名】

文月

### 【あらすじ】

フリーゲーム「ゆめにしき」一次創作です。  
「エフクト」「まじょ」をテーマに。

「あら、窓付き」

振り向くと、声を掛けた少女がひらひらと手を振った。黒髪で輪郭を闇に溶かし、瞳を三日月型に歪めて微笑していた。

「また魔女じこしてるのね」

ささくれ立つた簾から不器用に降りて、黒いロングスカートの裾を払う。竹の纖維が何本か、白黒の空気に舞つた。

少女はそれをつまらなそうに眺めていて、ひとつ、欠伸をした。

「だからその、窓付き、つていうのは何なの」

「あなたのことよ」

「それは前も聞いたけど」

「窓付き」は、服と同じ色の尖り帽子を深く被り直し、それでようやく少女の隣に腰掛けた。

「何で私が？」

「それだつて前も言つたぢやない。あなたの服に窓の模様があるからつて……まあ、今日は無いみたいだけど」

「今日の私は『窓無し』?」

風がごごつ、と間を掠めて、華奢な身体を撫でて行く。暗闇のどこのから風が吹いてくるのかと、窓付きはいつも不思議に想つのだ。今日の風は、雨の日の匂いがした。

「そう言つ訳でもないわ。もし裸ん坊でも、あなたは窓付き」

唇に微笑みを湛えたまま目を伏せて、少女は言つた。突風に煽られた艶のある髪が、まだ余韻を孕んでゆらめいている。

「良く分からないな」

呴いて、窓付きは微笑んでみようとした。少女のように上手くは出来なかつたから、すぐにそれを搔き消して、一度乾いた唇を舐めた。

「ねえ、簾に乗せてよ。私も空を飛べるかしら」

少女の同じ笑みの色がぐるぐる変わる。

「そんなに良いものじゃないよ。痛いし擦れるし疲れる」

「好き好んで」車で乗つて来て置いて、そんなこと言われてもねえ」

窓付きは首を傾げた。

「好き好んで……」

「なあに？」

「ううん」

闇色のスカートから伸びた足は唐突に白く、浮き上がりつて痩せて見えた。

「あなたには飛べないと思うな」

「どうして？」

「魔女がどうやつて飛んでいるか、知ってる？」

「知らない。魔法を使うのかしら」

窓付きの薄い唇がほんのわずか、強張りと見紛いつような笑みを浮かべたのを、少女は見逃さなかつた。横田で見られてくることに気づいているのかいなかつた、窓付きは丁寧に瞬きをした。

「すこし、ちがう」

唇だけを注視していると、内臓の色をしたその器官は、音のひとつひとつを抱き締めていた。誰もとても気付きたくはない、密やかなはたらきだつた。

「魔法なんて無いの。だけど、これはただの竹箒」

「マジシャンのように箒を手渡しながら、窓付きは囁いた。

「箒を飛ばす力は確かに存在する」

「それはなに？」

内緒話でもするよつて一人の声には吐息が混じり、言葉は実体のない雨に容易く溶けていく。

窓付きはおもむろに口をつぐんだ。十分に足元を眺め回して、少女からまた箒を受け取り、抱き締めて目を閉じた。

「あなたが言つたことは、正しいと思うの」

少女は黙つて頷いた。

「私がもしも窓付きなら、それは着替えたくら<sup>い</sup>じやあ変わらないし」

「頷く。

「私はきつと、心のどこかでそこまで分かつていて、簾に乗るのは楽しいなあ、と思ひ」

「頷く。

黒に覆われた窓付きの華奢な肩が、拙い台詞よりも多くを語ついていた。

「好き好んで」

付け加えて、窓付きは背伸びをした。吐き出した息の重みが、喉から絞り出すような声になつた。

「気持ち良いよ、真っ黒な服は」

「空を飛ぶのは？」

「うん。好き」

体温を帯びた少女の視線をこめかみに感じた。

「じゃあ、後ろに乗せて。あなたが飛んで」

窓付きはぽかんと口を開けた。無意識のうちに視線が合つていた。揺らがない笑顔を抗えずにつつめ返して、やがて窓付きは、息を抜くよつに苦笑した。

「仕方無いね」

「仕方無いのはあなたでしょう、窓付き」

返事はせずに簾に跨がる。不親切な柄が、もう熱をもつた太股をまた引っ搔いた。何か言つ前に、少女が背中にぴたりと密着したのが分かつた。色のない体は、窓付きよりも冷たくはあつたけれど、確かに血の通う感覚があった。

「ちゃんと跨がらないと振り落とすよ」

「窓付きに掴まるから平気よ。痛いのは御免だし」

横向きに腰かけて、少女は満足げな息を吐いた。

「ねえ、あの子らも連れていきましょ<sup>う</sup>よ。まだ簾は余つてゐるし

……トンネルへは近いはずよ、あの桃色の池へはあなたが良くな行くでしょう」「う

「ひとり残らず落ちたって知らないから」「う

「その時はあなたも一緒に、ねえ窓付き

少女の口許が背中越しに耳に近付いて、冷たい息が肌をくすぐった。振り返らなくても、彼女が笑っているのは分かつてた。

「たとえそうなつたつて、あなたは窓付きなんでしょう」「う

「そうかもね」

短く返したつもりだつたけれど、頬がかつと熱くなつて、窓付きは箒の柄を強く握り締めた。

「四人も飛ばせるかな」「う

「さあね」「う

「無責任ね」「う

一人の足元に旋風が巻き起こり、少女が小さく声を上げたときは、箒はもう空中へ浮き上がつていた。激しい風が三つ編みと黒髪をはためかせてかき混ぜる。スカートの裾が軽快な音を立てた。

「雨が止んだね」窓付きは呟いた。

「え?」「う

「なんでもない」「う

冷たさを切り裂くよに進んでいく箒を見下ろして、窓付きは他の少女たちを思い浮かべていた。飛べるだろうか。魔法とは別の力は。足がひどく痛む。いつしか微笑していた。

飛べるさ。

闇を脱した瞬間に強く照つた光がいつまでも目尻に残つていた。顔に吹きつける風からは、初夏の香りがした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0464ba/>

---

ゆめにっき二次短編 まじょ 「簞が飛ぶ理由」

2011年12月31日23時50分発行